様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年 １０ 月 ２４ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０５１７

研究課題名（和文）イロハ韻等の作詩用韻書を辞書史的に記述するための基礎研究

研究課題名（英文）IROHA in

研究代表者
岡島　昭浩（Okajima, Akihiro）

大阪大学・文学研究科・教授

研究者番号：５０１９４３４５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：　漢詩を作る際に韻を探すために使われたと思われるイロハ韻については、従来、その多様性が指摘されていたが、本研究により、その諸本を大まかに分類するのに、頭の見出し字によって分類することが有用であることがわかり、その基準に従って分類を行うことが出来た。すなわち、乾（いぬい）本・潼（いやし）本・雷（いかづち）本という分類である。
　このうち、江戸時代の中期以降盛んに使われた潼本についても、その中に於ける諸本の関係を、行数ではなく段の数によって分類することも提唱した。
　諸本のうちのいくつかを撮影・入力して、データを公開することが出来たのも、その成果である。

研究成果の概要（英文）：Iroha-in, a type of rhyming dictionary thought to have been used when composing Sinitic poetry, have been noted in previous research for their diversity. However, this research shows an effective method to classify various Iroha-in by looking at the first character displayed. Using this as a basis for classification, the various Iroha-in were divided into three main groups: (a) those starting with 乾 (inui), (b) those starting with 潼 (iyashi), and (c) those starting with 雷 (ikazuchi).
This research also indicates that Iroha-in of group (b), which were conventionally used after the middle of the Edo-period, can be classified by the number of columns used per page, but not as effectively by the lines per column.
Also, as a result of this research several Iroha-in were photographed, digitized, and made available online.

研究分野：日本語学

キーワード：辞書史　言語生活史　学芸史　諸本研究　和訓　韻事　韻書

１．研究開始当初の背景

イロハ韻(『以呂波韻』『伊呂波韻』両様の表記があるため、本研究では、これを「イロハ韻」と呼ぶ)は，イロハ引の単漢字字典で，中世末に登場し昭和初期まで刊行されていたものである。平仄に分ち，多くの本で『聚分韻略』の意義分類を踏襲し，所属韻を記すことから，漢詩作成を主目的としていることが知られるが，それに留らず，単漢字を調べる書としても機能していたと思われる。

和訓から漢字を引く辞書については様々な形式のものがあるが、イロハ韻については、さまざまなものがあること自体は、佐藤茂『いろは韻』考序説」(『国語国文学 (福井大学)』 11)、佐藤茂 「『いろは韻』について(承前)」(『国語国文学 (福井大学)』20□）ほかにより報告されていたが、その系統関係については、山田忠雄「伊呂波韻の古写本」(『長沢先生古稀記念図書学論集』）が、初期のものについてしめしたほかには、研究が進められていなかった。また、節用集のように通俗辞書と呼ばれるものや、和玉篇のような漢字辞書類のものと違って、本文の提供も少なく、諸本を比較しようとすること自体が困難であった。

２．研究の目的

本研究の目的は、イロハ韻等の作詩用韻書・探韻書を国語学的に研究するための、また辞書史に位置付けるための基礎的な研究にある。どのような異本があり、それらの関係はどのようなものか、また、イロハ韻本体以外の部分として、どのような性格のものが増補されたのか(どのような資料から引用されたのか)、などについて調査研究を行い、イロハ韻の諸本の姿を示すとともに、イロハ韻の全体像と他の類似書との違い・共通性を確認するために行うものである。

これらを明らかにしなければ、イロハ韻に見られる和訓について考えることもできないのであり、イロハ韻で使われている語を語彙史資料として使う際にも保留が必要となるからである。

３．研究の方法

イロハ韻の諸本間の関係を推定するために、また、あとから増補された部分にどのようなことが記されているのかが分かるようにするために、イロハ韻の諸本を収集し、突き合わせ、その差を記録して行く。その上で、イロハ韻諸本間の関係を考えるとともに、イロハ韻に影響を与えた書、イロハ韻から他の書への流れなどの拾い出しを進めて行く。その際、聚分韻略・韻脚集・熟語集、さらには和玉篇・節用集の類との関係の考察が中心となる。

また、従来、節用集などの辞書についての書誌学的研究の成果が、このイロハ韻の系統を考える上で大いに参考となるはずであるので、そこで得られた分析方法を応用しながらイロハ韻の系統を考えて行くこととする。

さらに、諸本の状況を広く知ってもらうために、撮影を行い、また、可能な限り、電子テキスト化も行い、電子テキストを利用して系統関係を探って行くことをも探って行く。

４．研究成果

本研究では、広く諸本を探し、見ることの出来た諸本を比較検討してその系統づけを行った。まず，最初の文字によって，雷(いかづち)本・乾(いぬい)本・潼(いやし)本・その他に分けることが有用であることが分かった。雷本は，比較的ふるいものの他に，文政 13 年以降の折本類がある。乾本は，寛永 11 年版以降の小型本が中心だが，寛文期の 2 本と，明治期の数本がある。潼本は，「韻語捷用集」を柱題に持つ本を中心とするが、それより時代的に遡るのが『増補伊路波三重韻』(明暦 2)で、イロハの次を意義ではなく韻目で分け、その次に意義分類で分けたことによって、東韻乾坤門の「潼」字が先頭に来ることになった。したがって、無刊年の『増補以呂波三重韻』は、「韻語捷用集」の類に先行するのではないかと推測される。

潼本内の分類には，各丁の段の数が指標となるが、7 段本の後に 8 段本、更に 9 段本・11 段本が現れる。また，「潼」字の漢字注の中の「一関」（すなわち「潼関」）は，『聚分韻略』以来のものだが，「門」の中を「关」ではなく「去」に作るものが見え，この違いも潼本内の系統の指標となる。

上記以外の数種の系統のうち，『伊呂波集韻』(明暦 2)は，和訓ではなく字音によるイロハ引である特徴を有するが，「潼」字の和訓「イヤシツム」は，拠った『聚分韻略』が，潼本の拠ったものと同系統であろうことを伺わせる。「イヤシ」の訓は、『聚分韻略』中世版の書き込み訓にも見えるものだが，「ツム」の方は，中世版への書き込みや，慶長壬

子付訓版などでは、和訓ではなく唐音として「ツン・ツム」と記されたものであった。これが、『聚分韻略』近世版の唐音を付さない版に和訓として載せられたことから，イロハ韻諸本でも和訓として扱われることとなったものであることを明らかにした。

更に、イロハ韻の和訓の源流について、聚分韻略との関係などを、鈴木功眞が多く明らかにして、現在学術誌に投稿中である。『イロハ韻』諸本のうち、近世初期のものを三本採り挙げ、それぞれ『聚分韻略』とどの様な関係にあるのかを、和訓を中心に明らかにしたものである。「雷本」「乾本」「潼本」から、『川越本』『寛永十一年版』『伊路波三重韻』を選び考察したが、採録字は、掲出字の分類や排列は全く異なるものの、ほぼ『聚分韻略』の採録字に収まっていることが明らかになった。そして、和訓に就いては、『イロハ韻』三本で共通する掲出字の和訓は、三本ともに8 割前後の割合で『聚分韻略』の和訓と一致する一方で、三本それぞれの特徴的掲出字の和訓は、『寛永十一年版』は三分の一程度に過ぎないのに対して、『川越本』は約半数、『伊路波三重韻』は三分の二程度と、一致率に差が見られることが明らかになった。また、イロハ韻の主要原拠であることが明らかな、聚分韻略についても、その付訓や、聚分韻略の近世期に於ける改編についても研究が進んだ。イロハ韻と関わる部分だけを記しておくと、「潼」の訓「イヤシツム」についての件である。通常のイロハ韻とは別系統の明暦二年刊『伊呂波集韻』にも、平声ト・トウの「潼」のところに「イヤシツム」とあり、享保十二年刊『画引増字分韻便覧』にも「潼　イヤシツム」は見える。これらの訓の出自は、近世期の聚分韻略によるものである。これら唐音由来の訓は、後の改変本聚分韻略では、あまり見られなくなっている。これは、唐音を付刻する本に限らず、唐音のない本でもツムなどは消えている。一方、イロハ韻に載せられたものは継承され、明治 31 年の増補以呂波韻大成（袖珍本）でも、なお載せられている、などである。聚分韻略の付訓は、イロハ韻などの付訓に流れ込んでいるが、その中には、唐音を和訓であると誤認したために生じたと見られる訓があり、こうしたものを洗い出さねば、漢字辞典類の訓の継承関係を考証し得ないことを示すことができたと考える。

また、集めることが出来たイロハ韻や聚分韻略の諸本は、積極的に公開して行こうと考え、電子化、電子テキスト化を行い、公開可能なものから公開することにした。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　６　件）
７８９−＾￥

〔図書〕（計　０　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　０　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　０　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
　イロハ韻
http://www.let.osaka-u.ac.jp/~okajima/irohain/

６．研究組織

(1)研究代表者
岡島昭浩　　(OKAJIMA Akihiro)
大阪大学・文学研究科・教授

研究者番号：50194345

(2)研究分担者
佐藤貴裕　　(SATO Takahiro)
岐阜大学・教育学部・教授

研究者番号：00196247

鈴木功眞　　(SUZUKI Norimasa)
日本大学・文理学部・准教授

研究者番号： 00339235

米谷隆史　　(YONEYA Takashi)
熊本県立大学・文学部・教授

研究者番号： 60273554

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：